



■ 日 時 : 平成28年12月11日 ■ 会 場 : 森ノ宮医療学園アネックス校舎

🏠 年内最後の講習会は、愛媛から経絡治療夏期大学の講師を務め、経絡治療の大家として活躍されている池田政一先生に2コマをたっぷり使って講演と実技をして頂いた。池田先生といえば多数の著書、何といても日本の鍼灸に寒熱の概念を導入し、「経絡治療学」統一の教科書にも反映されたという功績である。

■ 28年度 第6回学術講習会報告

■ 日時: 平成28年12月11日 ■ 会場: 森ノ宮医療学園アネックス校舎

「気血水の病理と病証」「瘀血の病理と鍼灸治療」

講師: 漢方陰陽会代表 池田 政一 先生

1. 「気血水の病理と病証」

傷寒論の太陽病篇では「脈浮、頭項強痛、而悪寒」と書かれている。気の流れを理解していればなぜそうなるかが診えてくる。そもそも太陽病とは病気の時期を示しているとして理解されているが、経絡の太陽膀胱経の病と考えれば、頭項強痛とは経絡上に症状が現れていることが分かる。脈浮とは陽気が発散できないため、外へ出ていきたくても出ていけず、皮膚内に停滞するので脈が浮いてくる。陽気が発散できないのは陽気が不足しているからで、陽気が不足し気の巡りが悪くなると冷えが生じる。これが悪寒である。この例は急性熱病を示しているが、気の動きを理解していると病理と病証が診えてくる。では、治療はどうするかという問題だが、太陽膀胱経の病だからといって膀胱経に補瀉すれば良いというものでもない。もう一度、気の動きに目を向けると、陽気の不足で気が発散できないのだから肺経を補うのである



例えば、主訴が副鼻腔炎（鼻づまり、臭覚異常）で肝虚症の患者の場合、肝虚陰虚熱証によって発生した熱が太陽経や陽明経に波及したものとみられる。臭覚異常まであるのは肺経にまで熱が波及した結果である。治療としては、肝虚証に対しては中封・復溜

(金穴)に補法を行う。主訴に関しては、手三里・尺沢また曲池と尺沢の中間点に圧痛を認められることが多い。

肝 虚 証	肝虚陰虚熱証 血が不足(血虚)して榮気は停滞するために熱が発生。中焦以下が冷える(下痢)。発生した熱は他の臓腑経絡に波及。
	肝虚陽虚寒証 血も榮気も不足して中焦以下は冷えて上焦に熱が多くなる(冷えのぼせ)。胃に熱が多くなれば便秘。発生した寒と熱による病証が他の臓腑経絡に波及。

気血水の動きとさらに寒熱を組み合わせることで、病証を正確に把握することが可能になり、本治のみや標治のみといった治療ではなく全身的な治療(池田先生曰く“古典的な治療”)を行うことが出来る。

2. 「瘀血の病理と病症と治療」

瘀血とは、血の流れが悪くなったり、
血が一カ所に滞っている状態である。

- ① 病因として、交通事故によるもの、月経不順、出産、中絶、流産、肝炎、熱病に罹患することが多い、腹が立っても我慢することがある、月経時の発熱または発熱しているときに不規則な月経があるなど、血行が悪い場合と血管が損傷している場合がある。

血行が悪い場合

- ・ 気虚：エネルギー不足で血行を促進する力、血を押し動かす力がない状態
- ・ 気滞：気の流れが悪ければ血液の巡りがスムーズでなくなる
- ・ 熱(血熱)：体内の熱が血に移ると水分が消耗した状態で、流れが悪くなる
- ・ 寒(血寒)：寒さで血管が収縮するし、冷やされた血が凝集し流れが悪くなる

血管が損傷している場合

- ・ 各種の外傷または内傷：血管に傷がつき漏れた血が排出されず一カ所に溜まる
- ・ 気虚：血管の壁が弱く血液が漏れ出しやすい状況
- ・ 血熱：熱によって血行が速くなり細い血管を破り出血を起こす

- ② 病理として、肝が血を貯蔵し、血流を調整するため、肝の機能が弱くなると、肝臓や肝経の流れている部位に血が停滞して生じる。

- ③ 病症として、瘀血の特徴として痛みが挙げられる。
- ・刺すような痛み、または切られたような痛み。
 - ・いつも同じところが痛み、同じ一定の痛さで痛む。
 - ・痛い所を押したり、揉んだりすると不快を感じる。
 - ・しこり、腫れ物が出来ている場合があり、体表にある場合は暗紫色に見える。
- 疾病としては、頭痛、肩こり、心臓疾患、食欲旺盛、便秘がち、足が冷える、腰痛、月経不順、月経痛、皮膚疾患、精神神経系疾患など
- ④ 脈症として、左関上が沈で実の特徴を示す。
- ⑤ 腹症として、左脇下に抵抗と圧痛の在るものが肝積で肝虚症を示す。
右脇下に抵抗と圧痛の在るものが肺積で肝実症を示す。
- ⑥ 治療として、腹部の硬結や抵抗の在る部位に灸頭鍼や散鍼（関元・天枢・大巨・外陵など）をする。
経絡上の経穴への刺鍼（切皮程度の深さ）をする。
捻挫、打撲などの急性瘀血では刺絡の後灸頭鍼をする。

今回は「気血水」と「瘀血」の病理と病証についてだった。今春に開業されて40年を迎えられる池田先生のお話は臨床家ならではの経験談が豊富で、特に若い鍼灸師や学生にとっては貴重な講演だったのではないのでしょうか。

（研修委員 中村 隆、荒木 善行）